

令和元年6月11日現在

機関番号：10101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K16703

研究課題名(和文) 国際関係をとおしてみる現代ロシア教会の列聖と聖人崇敬

研究課題名(英文) Canonization and Veneration of Modern Saints and International Relations of the Russian Churches

研究代表者

高橋 沙奈美 (TAKAHASHI, Sanami)

北海道大学・スラブ・ユーラシア研究センター・助教

研究者番号：50724465

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ロシア正教会および亡命ロシア人の結成した在外ロシア正教会における、ロマノフ王朝最後の皇帝ニコライ二世に対する崇敬と列聖から、それぞれの教会の歴史認識や政治的立場を考察したものである。生前、不人気だった皇帝は、亡命ロシア社会において革命の犠牲のシンボルとなり、ロシアの聖ヨブになぞらえられた。1981年には在外教会において革命への批判と復古主義のメッセージを本国に突きつける形で、革命期の多くの殉教者たちと共に聖人に列せられた。1980年代末以降、ロシア本国でも亡命教会で形成された言説が急速に受け入れられ、それは今日の復古的保守主義にまで影響を及ぼしている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ニコライ二世の崇敬は広く社会的関心を惹きつける問題であるが、本研究はニコライ二世の崇敬がいつどのように始まり、どう展開したのかという過程を歴史的な見地から明らかにすることができた。また、亡命教会の聖職者によってニコライ二世に付与された神秘的な意味づけが、ペレストロイカ末期のロシアで大衆的関心を惹きつけた正教と君主主義に対する関心と絡みあい、「ツアレボージュニキ」と呼ばれる極右的君主主義者の宗教集団を生み出したことへの注目も、ロシア政治と正教の昨今の関係を考える上で重要な示唆を与えるものである。

研究成果の概要(英文)： The primary purpose of this project is to shed light on historical narratives and political stance of the Russian Orthodox Church (ROC) and the Russian Orthodox Church Outside of Russia (ROCOR), analyzing the process of veneration and canonization of Nikolay II, the last emperor of the Romanov Dynasty. During his lifetime, he was a quite unpopular emperor, while after the Russian revolution, he and his family's tragic execution symbolized victim of the revolution and war. Then, Nikolay was compared to St. Job in Russia. In 1981, ROCOR canonized Nikolay II as a symbol of many other victims and martyrs under the Bolshevik regime, in order to underline critical stance to the revolution and revisionism in front of Soviet people. Since the late 1980s, Russian monarchist groups had positively accepted these discourse formed in the ROCOR, which link to the contemporary revisionist conservatism in Russia.

研究分野：宗教社会学

キーワード：ロシア ロシア正教 ディアスポラ 聖人崇敬

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

ロシア革命後、無神論イデオロギーを推進する党・国家の下で、教会は閉鎖され聖職者は減少した。しかし、宗教寛容政策がとられた第二次大戦中から戦後のソ連では、教会に通えなくなった多くの人々が聖なる泉・丘・木・川などの自然物や教会や修道院の跡地、墓を参詣したことが知られている。研究代表者は、以前の研究課題で、ペテルブルグの聖クセーニヤ(18C前半-1806?、1988年列聖)、モスクワの聖マトローナ(1881-1952、1999年列聖)、皇帝ニコライ二世一家(1918年7月16日銃殺、2000年列聖)といった著名な現代の聖人を取り上げ、その崇敬と列聖について検討した。彼らを祀る聖地では、連日何千人もの巡礼者が祈りを捧げるため数時間にわたり行列をなしており、聖人崇敬が現代ロシア正教におけるきわめて重要な宗教実践であることに疑念の余地はない。しかし、これについてはロシアの研究者であるS.シュティルコフやZ.コルミナなどが個別の優れた論考を英文・露文で発表しているほかはほとんど研究されておらず、日本国内ではロシアの歴史学や人類学研究者の間でさえほとんど知られていない(Kormina 2013、Shtylkov 2011ほか)。研究代表者は、現代の聖人崇敬についての個別の研究に加えて、事例の比較検討と列聖のプロセスを考慮に入れることによって、後期社会主義時代から現代に至るロシア社会における聖人の意義をより広範囲に捉えることを目指した。

### 2. 研究の目的

社会主義体制崩壊前夜の1988年以降、ロシア正教会は2,000人近い人物を列聖した。その背景には、聖人崇敬という宗教実践の社会的インパクトが増大したという理由があり、さらには、列聖が教会による歴史認識と政治的立場を表明する重要な手段となっているという政治的な側面が挙げられる。加えて、現代の列聖は亡命者のロシア教会が本国の教会に先んじて取り組んだ問題であり、列聖には正教会を通じた国際政治の要素も含まれている。

本研究課題では、後期社会主義時代から現代までの国際関係の中の正教会の役割に着目しながら、聖人の崇敬と列聖が現代社会において新たに帯びるに至った社会的・政治的意義を検討することを目的とした。

### 3. 研究の方法

本研究課題では、ロシア帝国最後の皇帝ニコライ二世の崇敬と列聖を事例として、以下の3点を明らかにすることを主要な研究課題とした。

- (1) 後期社会主義時代以降のモスクワ総主教庁による列聖のプロセスと聖人崇敬
- (2) モスクワ総主教庁とエキュメニカル運動
- (3) 亡命教会における崇敬の実態と列聖のプロセス

それぞれの対象について、アーカイブ資料、雑誌・新聞記事の収集と分析、関係者に対するインタビューを行った。

### 4. 研究成果

前項目で述べた研究課題(1)については、ロシア帝国最後の皇帝ニコライ二世一家の崇敬と列聖を中心に研究を進めた。2016年3月にモスクワで行った「列聖に関する聖宗務院委員会」の委員であるオレグ長司祭、イリヤ・グラズノフ(絵画・彫刻・建築アカデミーのポリシャコフ教授)に対するインタビュー調査、またエカテリンブルグで行ったニクーリン司祭、エカテリンブルグ郷土博物館学芸員ネウイマン氏および歴史家シートフ氏に対するインタビューと州立図書館で収集した文献を検討した。調査結果については、国内の研究会及び国際ワークショップで報告することができた。

(2)のエキュメニカル運動については、先行研究を調査した結果、エキュメニカル運動の全体像を把握するためには、かなり広範囲にわたってアーカイブ調査をする必要があることが明らかになった。その後、資料収集の過程で、聖チャーホン正教人文大学のAndrey Kostriukov教授による亡命教会についての優れた先行研究 *Russkaia Zarubezhnaia Tserkov' v 1939-1964 gg. (Moscow, 2015)* を参考にした。氏はロシア正教会渉外部に勤務した経験があり、部外者には閲覧不可能な渉外部のアルヒーフ資料をふんだんに用いた研究を上梓している。コストリューコフ教授とモスクワでの研究相談をした結果、渉外部のアーカイブが部外者には閲覧不可能であることが判明した。モスクワ総主教庁によるエキュメニカル運動について、新しい知見を発券することは短期的なアーカイブ調査では困難であるため、現在も継続的に調査中である。

(3)の亡命教会に関連しては、アメリカのシカゴ主教区とニューヨーク州の在外ロシア正教会聖シノド・アルヒーフ、およびジョルダンビリーの聖三位一体修道院の図書館で調査を行うことができた。シカゴでは、在外教会におけるニコライ二世一家列聖に関わった司祭の妻に話を聞くことができた。また、彼女自身が1970年代にツーリストとしてレニングラードの聖クセーニヤの墓を訪れた経験についても明らかになった。聖シノドおよび聖三位一体修道院での資料集では、クロンシュタットの聖イオアン神父、聖クセーニヤ、皇帝一家の崇敬と列聖に関する大量の一次資料および、新聞・雑誌記事を手に入れることができた。

在外教会が列聖に踏み切るに至った経緯として、在外教会を本国のロシア教会に従属するものではなく、真のロシア教会と考えた府主教フィラレート(ボズネセンスキー)が指導者となったことが、重要な意味をもっていたことを明らかにした。また、イオアン神父やクセーニヤの列聖に向けては、一般信徒からなる兄弟会/姉妹会がイニシアティブを取って、奇跡譚を収

集し、イオアンやクセーニヤの文化的表象の造形に大きく貢献していたことがわかってきた。一方の皇帝一家の列聖に関しては、歴史認識が大きな問題となった。皇帝一家の運命をどのように表象し、普及するかという問題が極めて重要であり、これに高位聖職者や知識人などのロシア人ディアスポラのエリートが大きく関わっていたことが、さまざまな資料から明らかになってきた。

生前、不人気だった皇帝は、亡命ロシア社会において革命の犠牲のシンボルとなり、ロシアの聖ヨブになぞらえられた。1981年には在外教会において革命への批判と復古主義のメッセージを本国に突きつける形で、革命期の多くの殉教者たちと共に聖人に列せられた。1980年代末以降、ロシア本国でも亡命教会で形成された言説が急速に受け入れられ、それは今日の復古的保守主義にまで影響を及ぼしていることを明らかにした。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

高橋 沙奈美、「ポリシェヴィキの対ロシア正教会政策とその帰結 国教関係、教会外交、「生きた宗教」」『ロシア史研究』第101号、2018年、47-60頁。(査読有)

高橋 沙奈美、「レニングラードの福者クセーニヤ 社会主義体制下の聖人崇敬」『宗教研究』第91巻、第3号、2017年、25-48頁。(査読有)

高橋 沙奈美、「マイダン革命とウクライナ諸教会の社会貢献活動」『宗教研究』第91巻、別冊要旨、2017年、161-163頁。(査読無)

Sanami Takahashi, "Reexamining the Myth of the Last Tsar's Family as a Religious Resource," *Russian Studies*, Institute for Russian, East European and Eurasian Studies, Vol 26, no. 2, 2016, pp. 399-413. (査読有)

\_\_\_\_\_.

//

( \_\_\_\_\_, 19-21 \_\_\_\_\_ 2016 )

V

2016. . 5037-5042. (高橋 沙奈美「レニングラードの聖クセーニヤ ソヴィエト・ロシアにおけるポスト・スターリン時代の宗教政策と民衆的正教」V. マンスーロフ編『社会学と社会 社会的不均衡と社会的正義：第5回全ロシア社会学研究大会報告集』モスクワ、2016年、5037-5042頁。)(査読無)

〔学会発表〕(計9件)

高橋 沙奈美、「皇帝が捧げた命 在外ロシア正教会におけるニコライ二世の表象」、共通論題A「ロシア・ソ連の記憶と政治」ロシア史研究会2018年度大会、首都大学東京、2018年。

\_\_\_\_\_.

\_\_\_\_\_ , 2018 . (高橋 沙奈美、「在外ロシアとツァーリ一家列聖問 在外ロシア正教会シノドのアーカイブ資料より」『ロマノフ・リーディングス 全ロシア学術実践会議』、エカテリンブルグ・アラパエフスク、ロシア、2018年。)

Sanami Takahashi, Affirmation of Russian Identity in the Diaspora: The Glorification of the Russian Imperial Family in the Russian Church Abroad, in the 50th annual convention of Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies, Boston Marriott Copley Place, USA, 2018.

高橋 沙奈美、「王の複数の遺体 宗教的資源としてのニコライ二世の不朽体」「聖地の政治経済学 ユーラシア地域大国における比較研究」研究会、東北大学川内南キャンパス、2017年。

Sanami Takahashi, Hidden Attachment to the Time Gone By: Image of the Last Tsar between the West and East in the Slavic-Eurasian Research Center international workshop “For the 50th Anniversary of the 50th Anniversary of the October Revolution...: Social and Political Foundations of the Major Ideological Campaigns of the 1965-1970s,” Sapporo, Japan, 2017.

Sanami Takahashi, A Forgotten Page of the Revolution: Taboo and Commemoration of the *Tsareubiistvo* (regicide) in the 8<sup>th</sup> East Asian Conference for Slavic Eurasian Studies “Conflict and Harmony in Eurasia in the 21 Century.” Chung-ang University, Seoul, Korea, 2017.

高橋 沙奈美、「革命を越えた祈り 社会主義は「信仰」の形を変えたか」ロシア革命100周年企画、ソビエト史研究会2017年次研究大会、専修大学サテライトキャンパス、2017年。

Sanami Takahashi, Social Activities of the Orthodox Churches after the Chernobyl Catastrophe, in ISSR/SISR 34th Conference “Religion, Cooperation and Conflict in Diverse Societies,” University of Lausanne, Lausanne, Switzerland, 2017.

高橋 沙奈美、「マイダン革命とウクライナ諸教会の社会貢献活動」パネル「政教関係の国際比較と新しい公共宗教論をめざして」(代表者：櫻井義秀) 日本宗教学会第76回学術大会、東京大学、2017年。

〔図書〕(計5件)

高橋 沙奈美、「北ロシアにおける聖地と文化遺産」杉本良男、松尾瑞穂編『聖地のポリティクス ユーラシア地域大国の比較から』風響社、2019年、担当部分115-146頁。

高橋 沙奈美、『ソヴィエト・ロシアの聖なる景観 社会主義体制下の宗教文化財、ツーリズム、ナショナリズム』北海道大学出版会、2018年、456頁。

\_\_\_\_\_ , 2018. . 264-270. ( 高橋 沙奈美、「長井辰男教授と彼によるロマノフ家のDNA鑑定」『第16回ロマノフ・リーディングス』エカテリンブルグ、2018年) .

\_\_\_\_\_ / \_\_\_\_\_ , 2017. . 389-391. ( 高橋 沙奈美、「日本における宗教社会学」Yu. スミルノーフ監修『宗教社会学百科事典』サンクト・ペテルブルグ、2017年。) .

高橋 沙奈美、「よみがえる宗教 民族的伝統としての正教と正教民族としての記憶」下斗米伸夫編『ロシアの歴史を知るための50章』、明石書店、2016年、担当部分300-305頁。

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名： なし

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8 桁）：

### (2) 研究協力者

研究協力者氏名： なし

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。